

## 都市空間文化財の地理的成層分析とモデルカルチャー・デザインに関する研究

主査 三村 浩史\*<sup>1</sup>  
委員 中山 徹\*<sup>2</sup> 西山 徳明\*<sup>3</sup>  
〃 冨田 アヂイキ\*<sup>4</sup>  
〃 小林 史彦\*<sup>5</sup> 王 郁\*<sup>6</sup>

キーワード：1)都市景観，2)空間文化財，3)寺内町，4)歴史的な文脈，5)アーバンデザイン，6)文化財環境の保全，7)地理的成層分布，8)保全的再開発，9)モデルカルチャー

### 1. 研究の目的と方法

都市の景観解析やアーバンデザインでは、ふつう、現存する景観を対象として、歴史的な文脈を表徴する目立った要素群を抽出して、保全しつつ調和する開発を図ろうとする。大筋として本研究もこの流れに乗っているが、次の点を新しい試みとしている。

- (1)歴史的に形成されてきた要素群が織りなす空間的パターンに注目し、これを「都市空間文化財」として解析とデザイン支援のツールとする可能性を考えた。
- 現在の歴史的都市の保全においては、単体の建造物や史蹟は保護対象となり、また特定の美観や伝統的町並みは保全の対象とされているが、歴史的市街地などが保っている独自の雰囲気や多様な構成の面白さを空間構成として把握し価値付けたいとの発想である。
- (2)都市空間文化財が、過去のいくつかの顕著なプロトタイプ形成時期の空間構成の栄枯盛衰の結果の合成であることに着目して、時代ごとの地理的パネル＝レイヤーマップの作成を試みた。
- (3)現存空間にそれらのレイヤーマップを重ね投影＝オーバーレイして見て、消滅から遺跡化、残存、変容、復元など各要素の保存状態別の構成として把握しようとした。
- (4)このような都市空間文化財としての把握が、アーバンデザインの局面で、どのような演出の動機付けや評価方法となるか、事例について可能性を検討した。

### 2. 研究の対象と手順

#### 2.1 時期ごとレイヤーマップの集成

研究の具体的な手順は以下のごとくである。

- (a)事例研究の対象としては、田原本（調査時点の人口6万人、奈良県）、蘇州（人口15万人、中国）およびジョグジャカルタ（人口20万人、インドネシア）の三つの中小地方都市を対象とした。いずれも、過去の地理的資料

や現地調査によりレイヤーマップ作成が可能であり、かつ密着して解析できる研究スタッフが存在することから選定したものである。

(b)上記の方針を共同基調としながら、それぞれの特性に応じて自由度をもたせて都市空間文化財の解析と記述を行った。なお田原本についてはフルシナリオで論述した。

それぞれの都市の歴史地理的データを入手するために試行錯誤を行った経験から次の手順を取った。

- ①歴史的記述ごとに各時代の古地図、絵図、町割図などの地図資料をベースに、古文献や地誌等の記述資料を採用した。今回の場合は、三つの都市とも、都市行政体の市史編纂部門、図書館、郷土史家の協力と指導の機会に恵まれた。
- ②収集できたデータを基本地図（現時点の白地図）上にプロットをし記載しようとした。しかし、事柄とその位置が不明確な場合は、辺り一帯といった丸いゾーンで示すにとどまる。寺社など、具体的に位置が確定的な要素が作業上のポイントとなりえた。古地図は、縮尺や座標設定があいまいなものが多いので、すべて現時点のマップ上に記述することにした。ただし、河川敷や道路の位置など地形ですら移動している可能性があるため、現時点地図と正確に一致するとは限らないことに留意した。
- ③都市計画を立案する場合、このようなデータが事前に準備されているとは限らない。この場合、史実の厳密さよりも空間構成のパターン、つまり諸要素の相互配列の構図を知ることが目標とするなら、問題提起の時点でのマップの精度は概略図でも役立つと考えた。より正確な地理学的なレイヤーマップを集成することは、考古学・歴史地理学・地域史等の専門家に依存すべきである。

#### 2.2 時期区分の設定

空間構成の理念とパターンの特性ごとに判断するのが

\*<sup>1</sup> 関西福祉大学 教授 京都大学 名誉教授（当時、京都大学 教授）

\*<sup>2</sup> 奈良女子大学 助教授 \*<sup>3</sup> 九州芸術工科大学 助教授

\*<sup>4</sup> 立命館大学国際環境開発研究センター 研究員（当時、京都大学大学院博士後期課程 4年）

\*<sup>5</sup> 金沢大学 助手（当時、京都大学大学院博士後期課程 3年）

\*<sup>6</sup> 京都大学大学院博士後期課程 3年

目標である。厳密にいった、社会政治史などで表示される時代区分と空間構成のパターンのそれとでは時期区分が必ずしも一致しない。地理的には前時代の基盤を利用しており、遅れ気味に緩やかな変容を示すので、特定の時点を設定できにくい、特徴あるひとつのプロトタイプの成熟をもって時期と考えた。結果的にいった、入手できたデータが社会政治的な時代区分を前提としているので、大きな時代区分と空間構成時期とはほぼ対応している。

(1)田原本の場合：次のような時代区分となった。一見す

ると社会政治史の区分であるが、地理的な差異としても見て取ることができた。

- ①先史「唐古集落」期
- ②古代「大和朝廷」期
- ③古代「平城京造営」期
- ④中世「集落多様化」期 (図2-1)
- ⑤近世「教行寺寺内町」期 (図2-2, 3)
- ⑥近世「平野氏陣屋町」期 (図2-4)
- ⑦近代「鉄道開通」期 (図2-5)
- ⑧現代「合併後」期

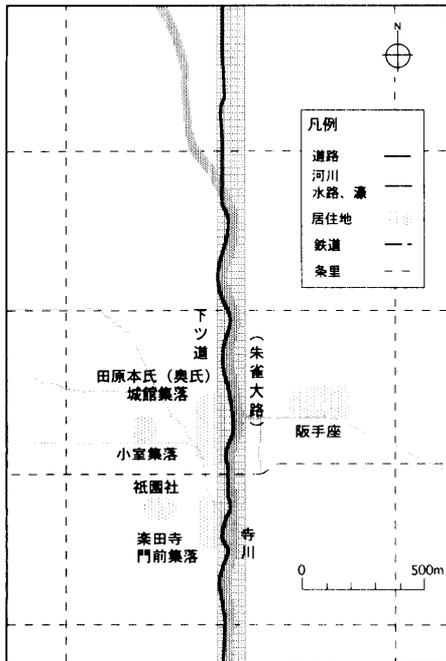


図2-1 中世「集落多様化」期

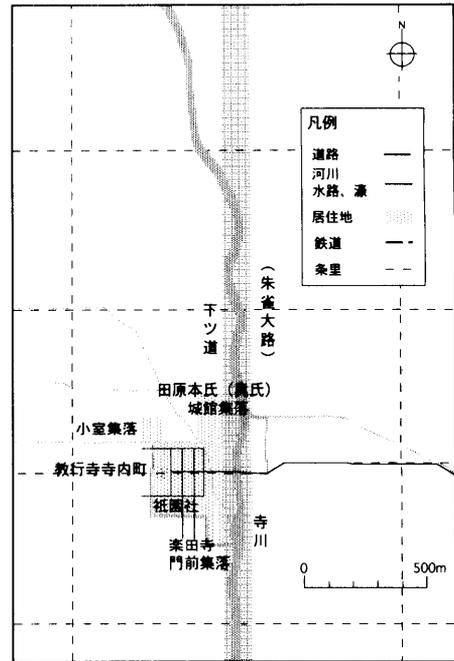


図2-3 近世「教行寺寺内町」期

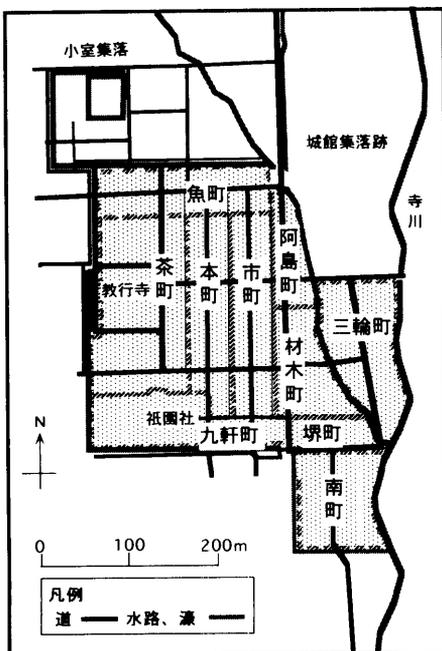


図2-2 近世「教行寺寺内町」期

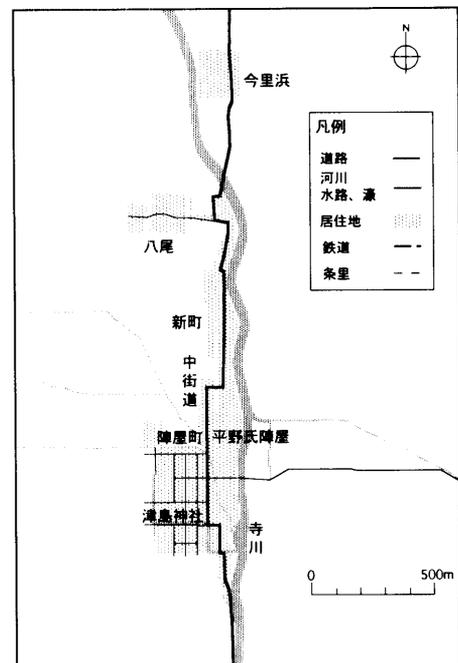


図2-4 近世「平野氏陣屋町」期

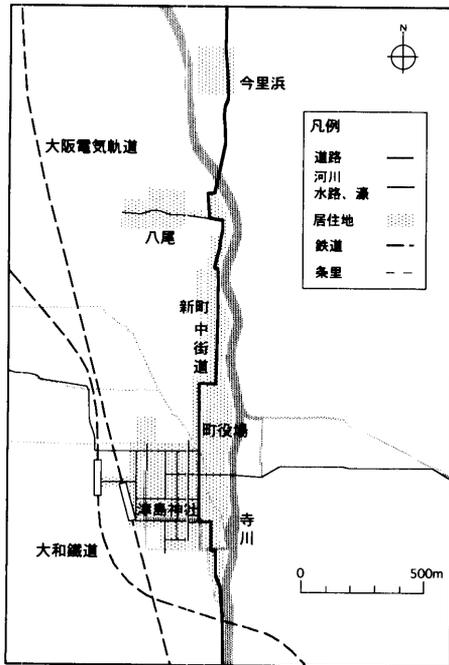


図2-5 近代「鉄道開通」期

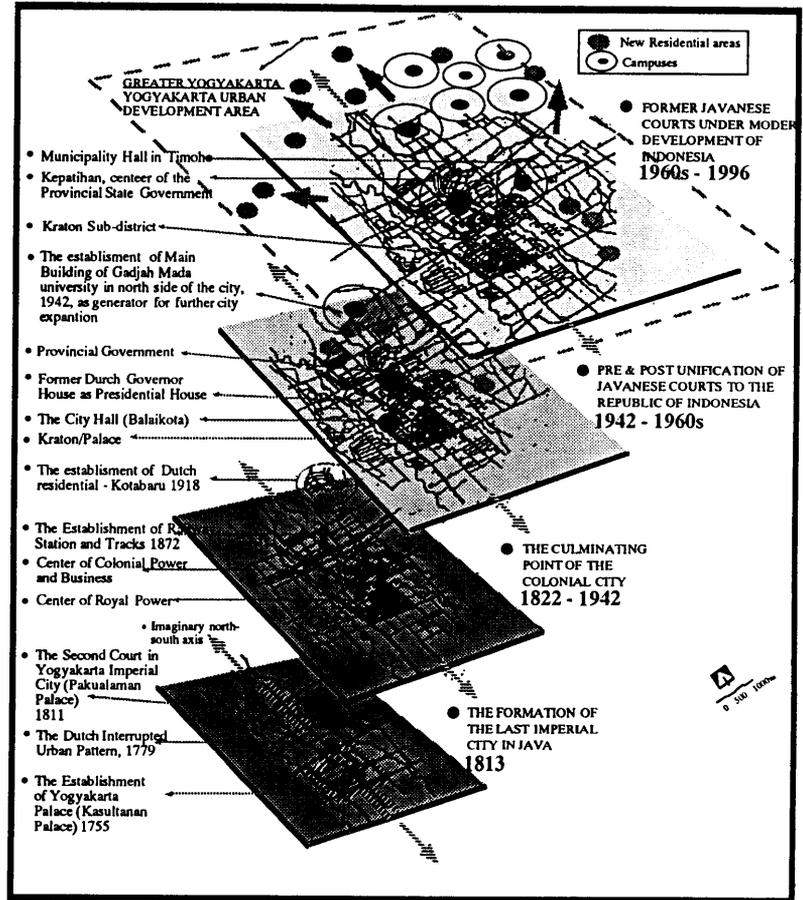


図2-6 ジョグジャカルタの空間形成

(2)蘇州の場合：文献記録や既往研究および現在の地図と  
 実地調査で整合作業を行って、五つの時代のレイヤーマ  
 ップを集成した。

- ① 建城初期
- ② 「坊里制」唐時代
- ③ 「商工都市」宋時代
- ④ 「邸宅庭園都市」明清時代
- ⑤ 「工業都市」計画経済期
- ⑥ 現代「開放経済」期

(3)ジョグジャカルタの場合：前の二つの都市と比べて都  
 市形成の歴史は浅い。宮殿を起点に、各時代の市街地が  
 拡張されたまま維持されてきており、改変・再開発は近  
 年まで少なかった。政治や経済の新しいパワーの登場に  
 よって都市構造が変容し時代のレイヤーを画するようにな  
 った。ある時代を特徴付ける変容が進行中の時期とその  
 結果新しいレイヤーパターンの安定をみる時期との関係  
 から、四つの区分が設定できた(図2-6)。

- ①ジャワ王宮-王国都市形成期(1755年~19世紀初め)
- ②植民都市最盛期(1822年~20世紀前半)
- ③連邦統合前後期(1942~1959年)
- ④近代行政・都市計画による開発期(1960~1980年代)

### 2.3 レイヤーへの記述内容

都市空間文化財を構成する要素として、どのような地

理的事項が、文脈解読と実地調査から見出されて記述可  
 能なデータとなったか。それぞれの都市の場合から拾い  
 上げてみた。

(1) 田原本の場合：

①先史「唐古集落」期<sup>文1)</sup>

弥生集落跡(「唐古のムラ」)、初期の環濠集落跡、旧  
 河道、水路跡、河港など大部分が埋蔵文化財。

②古代「大和朝廷」期<sup>文2)-5)</sup>

古道(「下ッ道」古代の幹線道路)、河道(「寺川」、河  
 港)、南北軸線の意識、古墳。

③古代「平城京造営」期<sup>文1),5),6)</sup>

条里地割(道、畦畔、水路網など)、奈良盆地の水田  
 景観、耳成山(大和三山の景観)。

④中世「集落多様化」期<sup>文7)-9)</sup>

祇園社、城館集落の遺構、門徒による環濠集落(前時  
 代の寺川、条里地割が基盤、鎮守の森)(図2-7)。

⑤近世「教行寺寺内町」期<sup>文10)</sup>

寺内町の町割(街路・背割り水路・宅地割)、両側町  
 の町並み、教行寺の薨=ランドマークと西方浄土の都市  
 軸線=門前通り、町家群(町家、祠、常夜灯など)(図2  
 -8)。

⑥近世「平野氏陣屋町」期<sup>文1),8),10)-12)</sup>

陣屋・大手門の位置、環濠・带状空き地、寺内町を包  
 含する陣屋町への編成替え、中街道の付け替え、ヨコ町



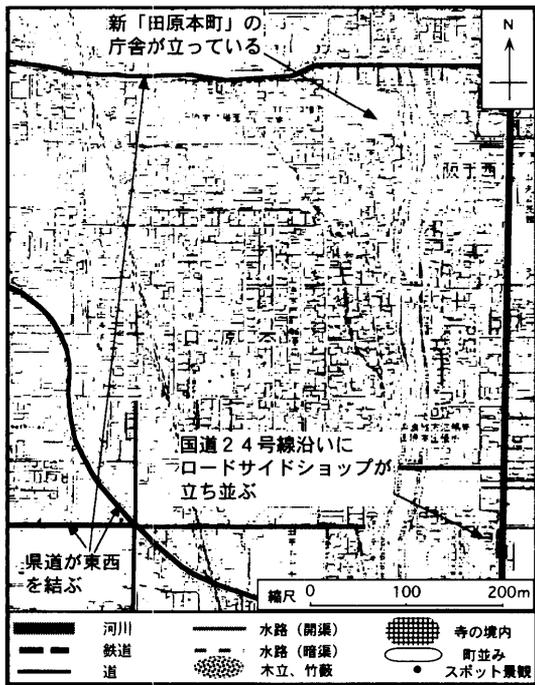


図2-11 現代「合併後」期

④「邸宅庭園都市」明清時代

富裕な農地地主・退職官僚の定住による邸宅と庭園(園林)の増加, 小商人・職人の併用住宅密集地区の形成, 全体としての蘇州の原風景とされる空間構成の成熟(景観要素: 城壁, 水門, 水路, 石橋, 水運, 古寺・古塔, 邸宅, 庭園, 商工市街地)。

⑤「工業都市」計画経済期

宅地・農地の工業への転用(城内の農地を大規模工場に, 旧市街地内の邸宅・家屋や空き地を中小工場に転用, 寺院の没収と転用)(図2-13)<sup>文20)</sup>。

建国(1949年)初期はインフラストラクチャー・建築物ともに新規投資の余地がなく, 工業都市化は既存ストックの転用によって実現された<sup>文3)</sup>ので, 都市空間構成パターンの変容は少なかった。しかし, 水運から陸送への転換のために, 水路の多くが埋め立てられ道路となった(図2-14)<sup>文21)</sup>。

⑥現代「開放経済」期

現在進行形。城壁・城門, 寺社・古塔, 古石橋, 庭園

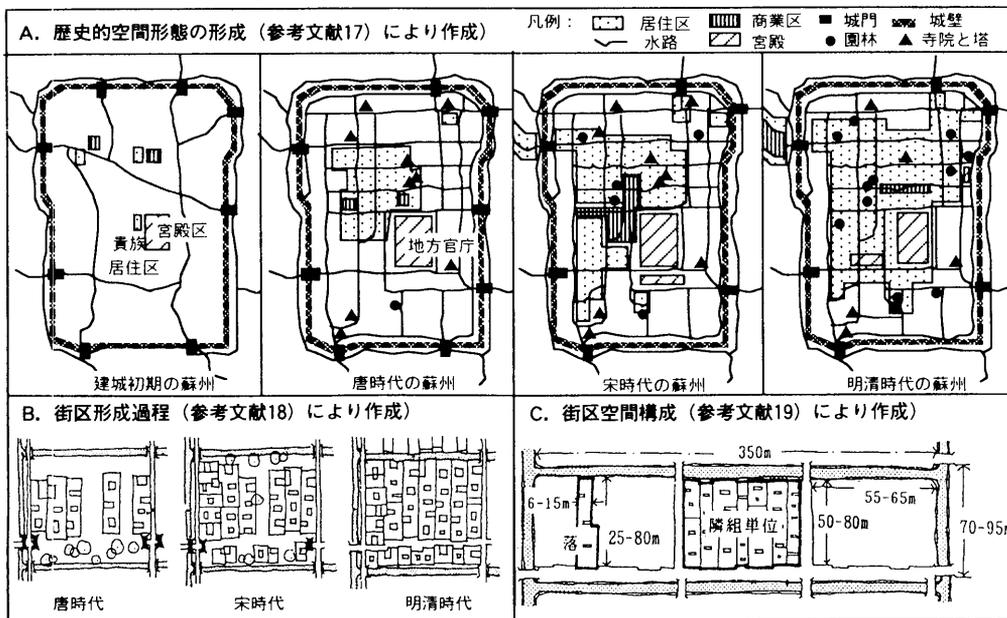


図2-12 蘇州の空間形成

城砦を守る外堤防, 水門, 水路から嵩上げされた不整形な宅地, 自然地, 中央に宮殿区。

②「坊里制」唐時代

城壁, 城門(水門), 環濠と大型石橋, 坊里制<sup>文1)</sup>による系統的な市街地形成(街路網が並行する整然と区画された宅地・水路網, 石橋), 寺院・塔の建立=ランドマーク, 地方官庁地区。

③「商工都市」宋時代

商業地区, 娯楽地区, 職人地区などの町並み形成, 水郷商工都市の景観形成<sup>文2), 文18)</sup>。

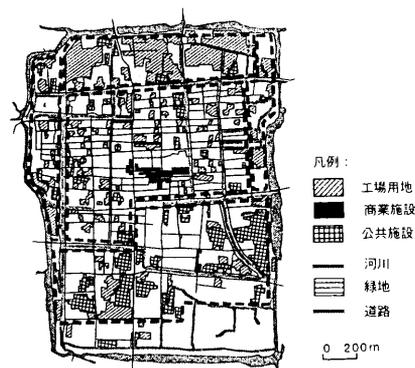


図2-13 主要都市施設の立地(1985年)  
(参考文献20)により作成)

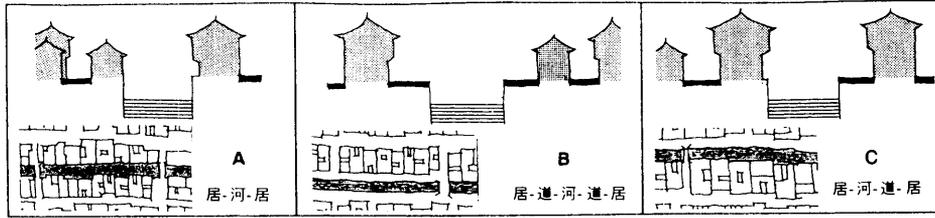
などの歴史的文化的財指定による保護、幹線街路の拡幅と沿道地区の全面再開発の進行、水路の埋め立て消滅と一方での水路の修復と新街路との新しい水郷景観の計画、全体として大規模な変容の進行。

(3)ジョグジャカルタの場合：概要を図2-15に、整合す

る関連年表を表2-1に示す。

①ジャワ王宮-王国都市形成 (1755年~19世紀初め) <sup>22)</sup>

ジャワの伝統の上にインド・イスラムの都市思想による方位観や主要施設の配置論理の導入と同化作用がなされ、北方のムラピ火山(独立峰)と南方のインド洋を結



水路・街路パターンプロトタイプ (参考文献21), pp.132により作成)

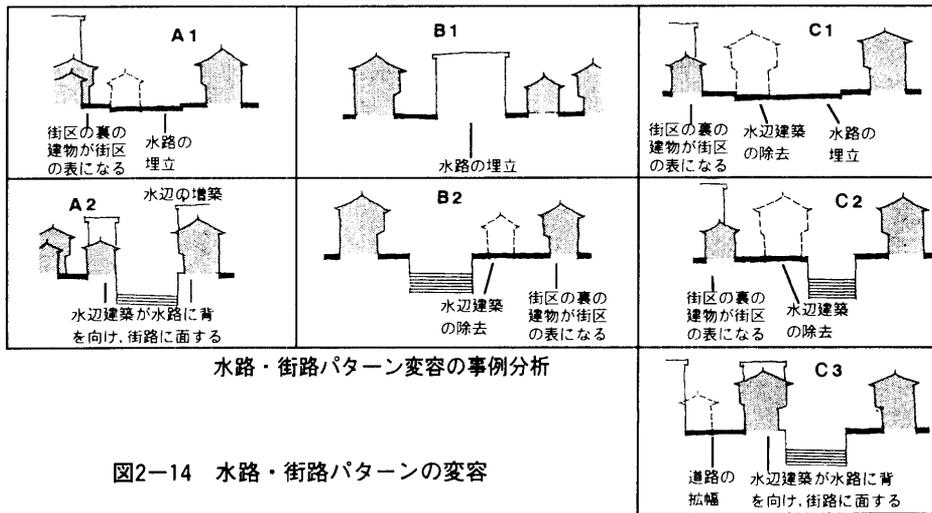


図2-14 水路・街路パターン変容の事例分析

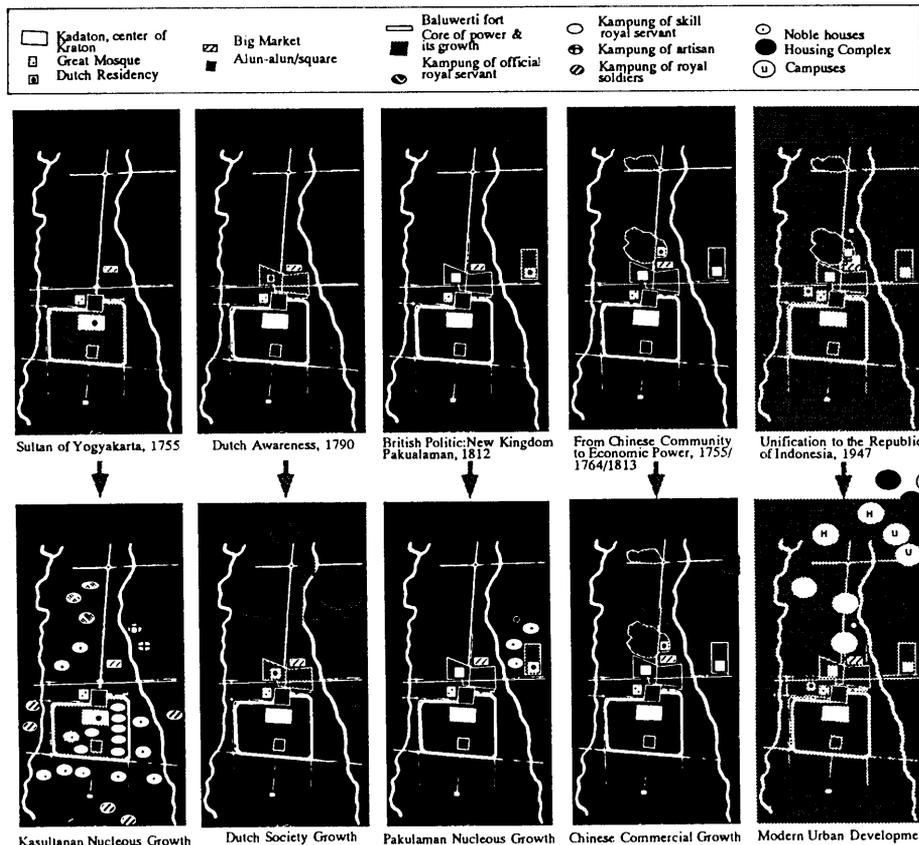


図2-15 ジョグジャカルタのレイヤー構成と変容

ぶ地域主軸線の設定がなされ、主要施設の配置も規定された。

北向きの景観軸＝マリオボロ通りの重要視、スルタンの二つの王宮（クラトン、中央モスク、二つの公式広場（アルンアルン））、貴族の邸宅群等の配置、王宮区を取り巻く城砦と濠、外周の王宮職員居住区、それぞれに意味をもった都市の植栽、バザール型の商業地区、ジャワ風の家屋と町並み、独特の屋根形による町並みスカイラインの形成。

王宮の北隣へ、南北軸線を分断してのオランダ公館地区。

②植民都市形成期（1822年～20世紀前半）

軍事砦の建設、イギリス植民府によるチョーデ川対岸への新王宮の設立。

煉瓦造洋風建築・植林地様式建築の登場、北郊に新開発された競技場・学校・戸建て住宅地・集会所などを含むオランダ人居住区＝ニュータウン、マリオボロ通りに洋風ホテル、鉄道駅の設置。

③連邦統合前後期（1942～1959年）<sup>231</sup>

国家行政機構の確立ともなう地方拠点としての官庁施設の建設、北郊におけるガジャマダ国立総合大学の立地。

中国系商人による商業店舗・住居機能＝ショップハウスのマリオボロ通り軸への集積、背後のジャワ人居住地区＝カンボンの居住地景観の対比の形成。

④近代行政・都市計画による開発期（1960～1980年代）

231～26)

北郊への私立大学のキャンパス・各種研究所の立地による研究学園地区の形成、ジョグ国際空港の開設、都市計画環状幹線道路建設にともなう新市街地の形成が進行。伝統的なパターンを離れた行政施設、大学施設の郊外立地が進み、都市空間の不定形化がみられる。しかし、まだ本格的なモータリゼーションが進行していないので、郊外型大型店舗は立地していない。マリオボロ通りへの商業集積（店舗と露店）と観光・飲食等サービス施設の集中、自動車・バイク・人力車（ベチャ）の過密輻湊の混合交通風景が現出している。民宿（ロスメン）地区や居住区＝カンボンの維持と改善事業、商業地区の再開発などが進行中である。

全体としていえば、新しい都市形成は外縁部において面的に拡大してきたので、旧市街地の歴代の都市空間文化財はよく保存されてきた。しかし、これは一面で都市整備のための再開発投資の立ち後れを意味しており、大きな変容はむしろ今後と予見できる。

2.4 オーバーレイによる都市空間への合成

(1)データベースとして

都市空間文化財の理解とアーバンデザインの支援のために、以上のような各時期ごとのレイヤーをどのような形で整理して提供すべきか。作成されたレイヤーマップを重ね投影＝オーバーレイして解読するのがシンプルな方法である。重ねなくとも、ある特定のスポットだけに注目してレイヤー冊子を繰れば、その地区の盛衰とその

表2-1 ジョグジャカルタのレイヤーマップ年表

THE HISTORICAL LAYERS				
Year 1755-1821		Year 1822-1942	Year 1942-1959	Year 1960-present
URBAN SPACE	Conceptual background	<p>Dutch introduce the European style</p> <p>Dutch introduce the zoning type, physical development:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- sanitation</li> <li>- kampung improvement</li> <li>- building standart</li> <li>- residential compound did not base on ethnic, but class of society</li> </ul>	<p>Transition period from Dutch, Japan occupation to the Republic of Indonesia.</p>	<p>Master Plan 1971 and 1986 highlight:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- the zoning system.</li> <li>- maintain the catur gatra tunggal</li> <li>- maintain the culture district</li> <li>- kampung improvement program</li> </ul> <p>Greater Yogyakarta project proposes the culture area in the historic site of Yogyakarta city.</p>
	Issues	<p>The different performance between Dutch built up area and the native created two type of built form "Gedongan" (brick masive building) and "Kampung" (wood and bamboo construction and kampung style of roof). It generated the issue of on and off street residential.</p> <p>The emerged of the colonial style of buildings</p> <p>The native cluster of setting performed various level of society</p>	<p>It was characterized by social-politic conflict.</p> <p>Rapid growth of urbanization and neglected the Dutch urban infrastructure.</p>	<p>Issues:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- encourage the new big construction in the inner city</li> <li>- decreasing of the people in the inner city</li> <li>- the emerge of new big construction in the north of city for campuses and residential area</li> <li>- demolishing of various old buildings</li> <li>- the catur gatra tunggal still maintain in the old city, but has not utilized in the new municipality center</li> <li>- bazaar type of business still alive</li> <li>- segregation way of activities still performed</li> <li>- the various stratification in one cluster of setting is still exhibited</li> </ul>
The composition of urban spatial structure in context to the growth of power summarized in the figure 4.36				

痕跡としての成層を時間軸に沿って理解できる。

たとえばジョグジャカルタの場合であれば、各時期の空間財は戦争・災害・再開発に遭うこともなく維持されているので成層というほどの形成がみられない。ただし、その都市空間財の利用の仕方や市民や観光客にとっての意味は変化しているので、そういった視角からの検討が、次の段階では必要かと思われる。

蘇州のような歴史的観光都市では、水郷、城壁、社寺と古塔、石橋、水路沿いの小道、邸宅と庭園といった各時期の要素が合成された原風景セットとして、これが蘇州であるとイメージされている。この場合に、市民や観光客が、歴史的層性＝レイヤー構成をどのように意識しているか、今回の研究では調査が及ばなかった。

田原本では、同じエリアで時期ごとの要素が重なっている。現存する施設や宅地は過去の空間用途や形態の上に築かれていることが多い。どの成層に着目して顕示するかは、後述するようにアーバンデザインの課題であり、この章の段階では、空間文化財の素材となる要素のデータベースを準備したという段階にとどまる。

#### (2)レイヤー要素の現存形態

たとえばロンドン市立博物館の展示には（最近江東東京博物館でも）高さ3メートルくらいの上の堆積断面があって、先史期からローマの植民都市期、中世都市、大火、産業革命、近代にいたる成層モデルがある。このように都市活動の痕跡は埋蔵遺跡となるものから、その所在と形態が史蹟公園のように地表面に表示されるもの、建造物のような実物が保存または復元されているものまである。都市空間文化財の考え方からすると、これらの個別要素への注目だけではなくて、それらの要素がひと

表2-2 都市空間を特徴づける要素・パターンリスト

風土	地形と気候、宇宙観による位相感覚、軸線
地域空間	パノラマ景観、盆地景観、水郷景観、平地景観、スカイライン、ランドマーク、地域植生、都市を取り巻くオープンスペースと市街地との形態パターン
都市空間	都市空間の構成原理とその形態パターン（寺内町、水郷市街地）、さまざまな居住地・まち（商工民居住地、商業地、貴族・官僚・武家屋敷の形態を継承する居住地など）の分布、その境界領域の存在（山稜、崖地、坂、水面、道路、異質な施設の存在など）
市街地空間	町並み、通り・建造物・機能・活動の様態、居住街区、近郊集落、路上の設置物（店舗、歩道、露店、街路樹など）
建造物	主要な公館、宮殿・王宮、公共広場、公園緑地、社寺、邸宅、庭園、街路・水路・橋・港の形状
敷地	場所性・位置、宅地割り（坊里制、規模・形状）、記念碑、史蹟、（由緒、残存記録）
地表基礎	湖・水面・水路・河川敷・池沼、耕作地・条里割り（田畑）、街道・広域幹線道路、市街地街区・区画割り
地盤	地質、元水域、堆積地、嵩上地・埋立地、干拓地などの前歴
浅層	建築物や水路・道路などの遺構
中層	古代の集落、耕作地、宗教地の考古学的遺蹟
深層	過去の地表（ジョグジャカルタではムラビ山の数百年前の大噴火で埋没した遺跡が眠っているかもしれない。田原本・蘇州では河道や水域・陸域の移動があったと推察される）

つの都市空間として相互関係をもって共存し複合的なパターンを織りなしていることまでを対象とする。三つの都市の事例検討から、共通の成層の要素・パターンの一覧を作成してみると表2-2のごとくとなる。

### 3. モデルカルチャー・デザインへの適用

#### 3.1 アーバンデザインの手法として

都市空間の記憶は不確かであり、再開発などで古い町が消滅した場合でも、あるいは個別変化が累積して変容（transform）する場合でも、人々の記憶をささえることは経験的にいって容易ではない。一方、史実や記憶にたよりつつ都市の過去をイメージする場合に、個々の残存要素が手がかりを提供する。また「山河」といった安定性のある地形ベースの地域景観が基盤となる。これらに比して、都市景観はライブであり移ろいやすいのが本質である。都市空間文化財を意識し、イメージの手がかりを豊かにするアーバンデザインの戦略として次のような内容で整理できる。

##### (1)個別の空間構成要素の顕示

(a)消滅・埋没した要素のガイド情報、現地顕示、(b)要素の部分や断片の保存と表示・周辺整備、(c)建造物の保存、外壁や記念物などを保存する保全的再開発、(d)個別要素を現地復元（レプリカ作成を含む）など、市民・観光客・探訪者がイメージ形成・風景再発見の手がかりをできるだけオンサイトで整え解説しやすいようにその存在を表現する。

##### (2)地域ごと歴史的レイヤーの表現

コミュニティ・住民ベースで考えると、都市を構成している各々の居住地のエリアヒストリーを知ることが、地域への愛着を深める。すなわち、(e)都市形成に関するミクロな情報としてレイヤーデータを提供できる。またその作成作業への参加が学習過程となる。(f)建造物の新設・更新などの機会は、地域のミクロな成層を知る機会であるので、調査、記録およびデータの提供と顕示を求める。

##### (3)都市景観計画・アーバンデザインへの適用

さまざま個別の要素を保存し顕示するということだけでは、都市景観としてのイメージ形成を図るには手薄である。都市景観計画・アーバンデザインという方法は、過去を継承しつつ、現代を創造し、その成果を未来に贈る市民・自治体のまちづくりの意図を積極的に表現するための手法である。都市空間文化財の理解は、歴史を手がかりとして、現代を演出する計画やデザインを支援するツールとなる。

モデルカルチャー（model culture）の発想は、もともと文化人類学ミュージアムの発想から生まれたものである。時間は長く空間は拡散している地域の歴史文化の展開を、専門研究者のためではなく市民や観光客が知覚

し享受できるためには、その興味ある流れをシナリオにし、舞台空間のように濃縮し模型（model）化して演出しようという発想である。どのような現代の演出＝モデルカルチャーを行うか、その創作は市民の選択であって、本研究は、その支援の手だてについて考える。ここでは、事例研究した都市についての計画実験を報告する。

### 3.2 田原本の中心駅前再開発計画の場合

#### (1)都市計画上の初期課題

奈良盆地のほぼ中央に位置して、近畿日本鉄道の名古屋線・京都線が交差する八木駅（橿原市）から三駅北に田原本駅があり、ここがこのまちの交通の要である。昭和30年代に周辺村を合併して町制をした。王寺と結ぶ鉄道支線の田原本線の終点があるが、京都線の駅とは70m離れ、その間に踏み切りがある。計画課題の発端は、よくある駅前再開発である。すなわち、①駅前広場がない、②二駅の連結統合、③急行停車駅のためのプラットフォームの延長と踏み切りの廃止である。町とコンサルタントの初期スケッチは、二駅の間にある市街地と空き地を再開発して、駅前広場と高層ビルを建設するという概案であった。

#### (2)都市空間文化財理解の適用（図3-1）

①寺内町の町並みの保全的整備プログラムはもっとも重要である。計画課題としては、鉄道駅前との関連がある。鉄道は寺内町を避けて社寺の背後の西側にルートを取った。そのため寺内町は駅前化しないで保全された。この意味は大きい。反面、駅前地区は発展が制約され無性格な地区となっている。

②田原本駅は、周辺村を合併した町にとって圏域全体の中心結節ポイントとして位置付けられ、現代的タウンセンターとしての開発が可能である。

都市空間文化財の理解から次の課題が導かれた。

③寺内町の空間構成原理は西方浄土であり光背となる西側のスカイライン・天空が大切である。それ故、再開発ビルの高さや形態については、特別の検討が必要なこと。

④新駅と寺内町との間の現駅前地区は、両者の中間ゾーンとなるので東西一体の駅舎とし、東広場と新都市計画街路、寺内町の土堀・環濠、寺社のスカイラインを演出する媒体ゾーンとして設計すること。

⑤奈良盆地の中央にあり、やや北下がり位置にある新駅施設は、古道や条里水田農村を見渡せるので、ある高さの眺望ポイントを設置する。また逆ビスタとして、盆地内に広く分布する環濠集落や低層住宅団地からみると、新しい駅施設はランドマークとなると提案できる。

⑥文化財要素が豊富な地域であるので、近年内外の都市で試みられている時代（古代、中世など）やテーマ別（寺内町の町衆と祭、大和盆地の生い立ちなど）のシナリオに沿った複数のアーバントレイル（urban trail）を設ける手法は効果的であると思われる。

### 3.3 蘇州の町並み保全計画の場合

名立たる古都であり主要な文化財は国家保護の対象になっており、一方で、新しい都市計画幹線道路のため道路が拡幅され沿道街区の中高層建築群へ再開発が急速に進行している。問題は、両者の中間にあり、かつ水郷都市の市街地として独特の風格を維持してきた細水路と細

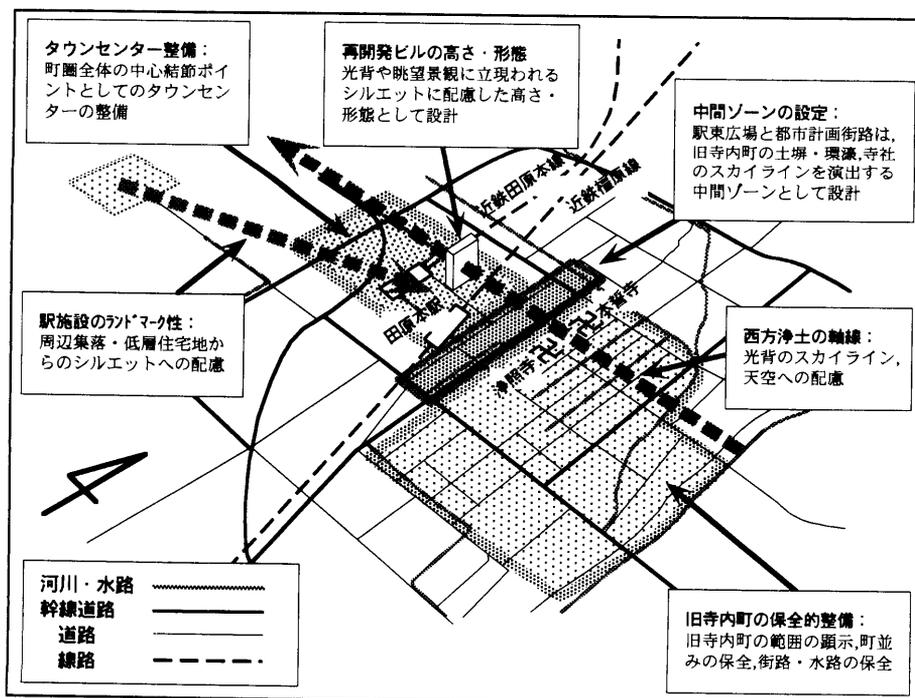


図3-1 レイヤーマップ分析結果のアーバンデザインへの適用

街路、低層住居の町並みが保全対象になっていないことである。いわば、図に対する地模様の大切さが等閑になっている。モータリゼーションとともにアーチ型の石橋も姿を消すものが多い。地模様が失われいくいま、これら中間ゾーンを図と意識して町並み保全計画を立てることの重要性が都市空間文化財の観点から導かれる。

### 3.4 ジョグジャカルタの中心地区整備計画の場合

王宮・広場はスルタンが、オランダの植民時代施設は行政庁が利用管理しているが、文化財という評価や保護指定の動きがない。レイヤー分析を示して行った、専門家との討論から、①主な軸線で道路であるマリオボロ通りの高層化による圧迫感、交通の一層の集中によるアメニティの喪失が当面の問題である。内環街路の補強により主軸通りへの都市機能の過度集積と交通集中を軽減して、市民と観光客にとってマリオボロ通りのジャワ王宮都市としての歴史性の演出・シンボル道路化が必要。②地方都市らしい雰囲気のある民宿・店舗・住宅混合のインナー市街地が維持できる歴史的な町並みの住環境整備の必要性が導かれた。

## 4. 結論

- (1)地理的な成層分析を現代都市空間に投影することで都市空間の歴史的形成要素を保存状態別に理解し、計画のためのデータベースができることを実証した。
- (2)個別的要素とその組み合わせおよび町並みや都市・地域景観という小・中・大空間スケール座標上への整理が空間文化財の構成理解に有用であることを示した。
- (3)都市空間の集成パターンが文化財となりうる価値評価や認定は、単体文化財の場合とはちがって、その都市空間の文化的演出＝モデルカルチャーの表現意図に応じてなされる性質が分かった。
- (4)市民や観光客がそれらの価値をどのように知覚し享受できるのか研究と演出設計については予備検討にとどまっており、次段階の課題である。

### <注>

- 1) 唐時代の都市計画と街区管理制度である。グリッド状の街路によって街区が分けられ、街区の入口に標識としての建物「牌坊」が設けられる。住民の日常行動や商業活動はすべて街区の中に限定される。
- 2) 「中国・蘇州市の住宅地の形成の研究」によると、唐時代まで水路に近い部分の地盤が大変弱くて、住宅は街路の間に建てられ、街路と水路の間に樹木等があった。宋時代以後土木技術の発展によって地盤の固定化が進み、水路に近い所にも住宅が建てられるようになった(参考文献18), pp.25~26)。
- 3) 上海同済大学都市計画学院阮儀三教授へのヒヤリングによる。このような状況は一般的にも知られている。

### <参考文献>

- 1) 田原本町町史編集室編：田原本町史 本文編，田原本町役場，1986
- 2) 上田正昭編：探訪 古代の道1. 南都をめぐるみち，法蔵館，1988
- 3) 上田正昭編：探訪 古代の道2. 都からのみち，法蔵館，1988
- 4) 藤岡謙二郎：大和川，学生社，1972
- 5) 松浦茂樹：国土の開発と河川一条里制からダム開発まで一，鹿島出版会，1989
- 6) 井上和人：条里制と開発の歴史一条里地割の施工年代をめぐって一，月間文化財，第一法規出版，1996. 11
- 7) 吉田栄治郎：田原本寺内町成立に関する試論－真宗教線の拡大に関連して一，田原本町史編集室編，田原本の歴史 第1号，1983
- 8) 田原本町史編集室：田原本の町場の形成について－複合的融合都市一，田原本町史編集室編，田原本の歴史 第6号，1987
- 9) 児玉幸多，坪井清足監修：日本城郭大系第10巻 三重奈良・和歌山，新人往来社，1980
- 10) 土平博：大和国田原本陣屋町の地域構造，歴史地理学155，1991
- 11) 堀井甚一郎：最新奈良県地誌，大和史蹟研究会，1961
- 12) 山崎俊郎：近世・近代における田原本の歴史地理学的考察，追手門学院大学文学部紀要4，1970
- 13) 西藤二郎：田原本鉄道の形成過程と経営者の理念，京都学園大学論集13-3，1985
- 14) 川島令三：全国鉄道事情大研究 大阪都心部・奈良編，草思社，1993
- 15) 田原本町編：田原本駅周辺地区都市活力再生拠点整備事業地区再生計画報告書，1995
- 16) 田原本町編：たわらもと都市計画マスタープラン（草案），田原本町役場，1996
- 17) 伊原弘：蘇州・水生都市の過去と現在，講談社現代新書，1993
- 18) 鈴木充：中国・蘇州の住宅地形成の研究，財団法人住宅総合研究財団，1992
- 19) 鮑家声：伝統居住街区改造更新設計探，旧城改造，pp.135~140，精華大学建築与城市研究所編，精華大学出版社，1993
- 20) 蘇州市総合計画（1985~2000年）説明書，付図2，蘇州市都市計画局，1986
- 21) 兪繩方：水都蘇州，水網都市，p.132，世界都市研究会編，学芸出版社，1993
- 22) Carey, Peter: Yogyakarta: From Sultanate to Revolutionary Capital of Indonesia. The Politics of Cultural Survival, Cultural Survival, No.39, p.19, 1986.3
- 23) Carey, Peter: Orang Jawa & Masyarakat Cina (1775~1825), Pusaka Azet, p.50, Jakarta, 1986
- 24) Yogyakarta Master Plan 1971, Working Paper I, Master Plan of Yogyakarta, 1972
- 25) Yogyakarta Master Plan 1986, Evaluation Study of Yogyakarta Master Plan
- 26) Yogyakarta Urban Development Strategy 2019, Yogyakarta Urban Development Project

### <研究協力者>

植栗 健 (株)関西電力(当時, 京都大学大学院修士課程2年)